

アジア教育文化ジャーナル

第6巻 2024年3月

原著論文

佐久間良恵

保育士の乳児に対する「抱っこ」の基準に関する意識 1

研究ノート

長沼貴美・宝田慶子・二村文子・片岡優華・浜口恵子・中満麻子・佐藤美香

沐浴体験授業に参加した中学生の対児感情と将来の職業に対する意識の変化 21

中日教育研究学会

Society of Chinese-Japanese Education Research

【原著論文】

保育士の乳児に対する「抱っこ」の基準に関する意識

佐久間良恵*

摘要

本研究では、保育士の乳児に対する「抱っこ」の基準に関する意識を明らかにすることを目的としている。4つの保育事例「登園の場面」や「午睡の場面」等と内的作業モデル尺度を用いた質問紙調査の結果、保育者個人の持つ内的作業モデルのパターンが「抱っこ」やその理由に影響を与えていることや、保育者は正解のない中で臨機応変な対応をとる、という判断基準に応じて保育実践を試みている傾向があるということが明らかにされた。また、保育者は、自身の持つ「抱っこする」際の判断基準を客観的に意識し、それ自体が目の前の子どもの豊かな育ちやその先の将来に影響を与えている可能性があるということを自覚して保育を行う必要があることが示唆された。

キーワード：愛着、乳児、抱っこ、意識、内的作業モデル

1. 問題と目的

1.1 乳児保育の現状と課題

近年、世界的にも幼児教育・保育の重要性が証明されている。その根拠として、乳幼児を対象とした幼児教育・保育に経済投資を試みることは、児童期以降における各段階での自己生産性を継続的に高めることにつながる(Chnhaほか, 2005)。このような潮流の中、保育現場で行われる「抱っこ」は、愛着形成において重要な意味を持っている。ここでの「抱っこ」とは、「子どもを持ち上げ、両腕に抱え

* 東京家政大学

るといった一連の現象として客観的に観察しうる行動」(飯塚, 2009)と定義されており、片方の人物がもう一方の人物の体に両腕を巻き付けて抱きしめる行動である「ハグ」とは異なる。西條(2004)は、発達の初期において、授乳、なぐさめ、運搬、コミュニケーションといった行為はしばしば「抱き」を介して実行され、子どもは「抱き」の状態によって周囲の危険から守られ、さらに「抱きつき」、「しがみつき」、「よじのぼり」といった行動が愛着対象への接触を求める愛着行動の一つであるとしている(Ainsworth, 1963)。同様に、村井(2019)は、生理的な欲求が表出される様々な保育場面となる食事、睡眠、排泄、清潔、着脱には常に「抱っこ」があるとしている。このことから、保育士の「抱っこ」は乳児の生命の保持や情緒の安定など、健全な心身の発達に多大な影響を及ぼすと推察される。しかし、「抱っこ」それ自体の保育行動の適切さに関する基準を裏付けるためのエビデンスは明らかにされていない。すなわち、生涯発達の基礎を培う上で極めて重要な乳児保育は、保育士のカンやコツで営まれているという問題が浮かび上がる。

2022年4月時点における1歳児・2歳児の保育所等利用率は56.0%である。その大きな理由として、家庭の生計の保持や女性の社会進出のため、夫婦の共働きは勿論のこと、一緒に住む家族全員が働くことが多いことから、乳児の保育所入所はさらに増加していくことが予想され、その影響による保育所保育の質の低下及び保育士の専門性の低下への影響が懸念されている。小島・市野(2019)は、乳児保育の抱える課題について「特に乳児保育は、人格形成の基礎を培うためには非常に重要であるとされながらも、保育の質が保証できているのかどうか疑問が残る。また、乳児保育では、特定の人との愛情深い絆を作る保育を求められているものの、少人数保育や育児の担当制による応答的なかわりが行われていなかったり、職員間の協力や連携が確実に行われていなかったりする現状もうかがえる」と指摘している。よって、乳児クラスでは複数担任制が一般的であり、たとえ乳児3名に対して保育士1名の設置基準が設けられていても、乳児は一日のうち複数の保育士とかかわる、保育士の複雑なシフトや不安定な養育環境の中で保育を受けていることになるかと推測される。

社会福祉法人保育協会(2012)が保育所に実施した調査「保育所における低年齢児の保育に関する調査研究」では、低年齢児保育における保育時間は11時間から

12 時間に集中しており、特に 12 時間以上 12 時間 30 分未満の占める割合が多く、正規の 8 時間保育を大きく上回っていることが示された。また、3 歳未満児には特定の養育者による養育が望ましいとされているにもかかわらず、担任制の実施は 0 歳児保育においては 47.4%、1・2 歳児保育では 46.6%にとどまっている。さらに、保育士自身は担当制(担任制)の目的や内容を、記録や連絡帳の記載などの業務のためであると捉え、実践している保育士が多いということが読み取れる。さらに、「情緒の安定」「人への愛着」「泣いた後の対応」などの子どもと保育士の情緒的な関わりに関する項目の回答数が、記録等の回答数よりも少ないことから、担当制(担任制)の役割や目的を、情緒的な関わりのためというよりも、記録のためであると意識している保育士が多いということが示唆される。

これらのことから、多くの低年齢児が養育者と長時間離れることによって情緒的不安定に陥る保育環境に晒されてしまっている。また、複数の保育者による保育の場合、教育的意図に沿ったかかわりの一貫性が担保できない可能性がある。そもそも、保育士の担当制(担任制)の役割や目的の意識に偏りがあるということが読みとれる。このままの状況では、乳児が特定の人との愛情深い絆を形成することは困難であると同時に、保育所保育そのものの質の低下、及び保育士の専門性低下の懸念を払拭することは困難であろう。

1. 2 乳幼児期における愛着形成の重要性

愛着について、遠藤(2005)は、「危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、またこれを維持しようとする個体(人間やその他の動物)の傾性」であり、「本来、ネガティブな情動状態を、他の個体とくっつく、あるいは絶えずくっついていることによって低減、調節しようとする行動制御システムのことである」と指摘している。このことから、養育者と長時間離れることで情緒的に不安定になりやすい低年齢児にとっては、保育者は物理的に近接を求める対象であると同時に、安心感を与えてもらうことによりネガティブな情動を低減、調節するために重要な役割を果たしているといえる。

また、近藤他(2017)は、アタッチメントについて、アタッチメント対象によって安心感を得て生存を保障する行動システムであるとし、表象機能が発達すると、それまでの関係性が内在化して、表象としてのアタッチメントを考えることが可能であり、それをアタッチメントに関する内的作業モデルとしている。内的

作業モデルの特徴は「その時々で、外界の情報を評価する（特に、アタッチメント対象の利用可能性について）」、「その時々で、適切な行動を導くモデルとなる」、「通常、意識されることなく働く」、「アタッチメント対象との相互作用の中で形成される」、「一度形成されるとなかなか改定されないが、新しい関係性を経験することによって変化することもある」の5点である。ここでの内的作業モデルは、アタッチメント対象に関する作業モデルであるとともに、そうした安全基地をもち安心を感じられるかどうかの自己に関する作業モデルであるという2つの側面を持っている。また、アタッチメントは自己感の基盤をなすものであり、健全なパーソナリティの発達に寄与する。

この内的作業モデルの形成について粕谷・菅原（2001）は、乳幼児期、児童期および思春期という未成熟な時期に徐々に形成されていくとし、生後6か月から5歳前後が内的作業モデル形成のもっとも敏感な時期とされているが、その後も少なくとも15歳までは可塑性は持続するとしている。また、この時期に形成された内的作業モデルは一生を通して比較的变化することなく持続する傾向があるとしている。庄司他（2008）によると、ボウルビィは内的作業モデルを「人や世界との持続的な交渉を通じて形成される世界、他者、自己、そして自分にとって重要な他者との関係性に関する表象」と定義している。さらに、人生早期の経験によって形成される「自分にとってアタッチメント人物は誰であり、その人物に対してはどのような反応が期待できるか、自分はアタッチメント人物にどのように受け入れられるのか」についての期待、確信や考えは、その後の世界や他者とのかかわり方に、ある特定の形で影響を及ぼしていることを示唆している。

これらに加え、作田他（1981）は、「特に子ども時代の経験は、後年、安心の人間的基盤を求めるかどうか、また、機会が訪れたときに互いに貢献し合う人間関係を創り維持する能力の程度の両者に、多大な影響を及ぼします。」とし、こうした相互作用のために最初に形成されたパターンは持続する傾向があり、子ども時代に体験した愛着関係のパターンがパーソナリティの発達に決定的な重要性を有するとしている。さらに、池田・楠（2019）は、養育者との間に安定した愛着を形成することは、健康的な内的作業モデルの形成や、心身の恒常性の維持を可能にし、その後の一生に大きな影響を与え続けるとしている。

これらのことから、内的作業モデルの形成の最も敏感な時期とされる乳幼児期

に深くかかわる保育者は、自身の関わり方が目の前の子どもたちの将来の人間関係や心身の恒常性の維持に大きく関与しているという意識を持ち、担当制(担任制)の役割や目的を再確認する必要があるといえる。

1. 3 子どもの愛着対象としての保育士

数井(2001)は、母親以外の人物が子どもにとっての愛着対象者となり得る基準として、「①身体的・情緒的ケアをしていること、②子どもの生活の中における存在として持続性・一貫性があること、③子どもに対して情緒的な投資をしていること」であるとしている。保育者は以上の基準に当てはまるため、養育者が不在である保育所の保育者は、子どもにとっての愛着対象者の役割を担っていると捉えることができる。特に、早期の段階で養育者から離れ、保育所で長時間を過ごす子どもは保育者を愛着対象とみなし、探索行動を行う上での安全基地として認識していると推察される。そもそも、ヒトの子どもは、集団子育ての中で親以外の他者からのケアを受け入れて成長・発達するメカニズムを備えていると考えられている。そして、母子関係におけるアタッチメント以上に子どもが家庭外で最初に出会う保育者などとのアタッチメントの質が、その後の保育所や学校といった集団的状况の中での社会的適応の鍵を握る可能性が高いということが明らかされている(秋田, 2016)。

これらのことから、保育士は、乳幼児期という愛着形成において重要とされる時期の大半の時間を一緒に過ごす最も身近な他者であり、愛着対象となりうる基準をすべて満たすことから、子どもにとっての愛着対象の役割を担っている。また、子どもと保育士間の愛着形成は、子どもの集団における社会的適応やその後の人生に大きくより良い影響を及ぼすという点で重要であるといえる。

1. 4 「抱っこ」に関する研究動向とその効果

「抱っこ」に関する研究はこれまで、「抱っこ」する際の左右の優位性や、「横抱き」から「縦抱き」への移行(西條, 2002)等、「抱っこ」の行動面に着目したものが多く、これに対して飯塚(2009)は、「抱っこ」を通じた愛着形成や母子関係の成立等といった情緒的な面にはあまり目が向けられていなかった点を指摘し、今後は行動観察だけでなくより情緒的な部分に踏み込んだ研究が必要であるとしている。また、帆足(2001)は、保育現場での「抱っこ」の意義について、子どもの情緒の安定だけではなく、子どもの成長に必要な「自己表現力」、「他者への信

頼感」、「他者と在ることの心地よさ」、「他者の情緒を感じとる体験」や、「抱っこ」によって得られた安定から人間関係が発達していくことが明らかにされたとしている。さらに、竹澤他(2007)は、集団生活の場において保育士が積極的に子どもを抱きしめていくことが園児の協調性と落ち着きを増し、不安の程度を軽減する効果があることを明らかにした。

これらに加え、村井(2019)は、現場で保育している保育者の意識が子どもに影響すると認識し、乳児の生活活動における保育者の意識について、抱っこの視点から調査を行った結果、乳児の生活活動における「抱っこ」場面について保育士が困っている内容は「抱き癖」「対応の困ること」「その他」に分類され、「抱っこしすぎると抱き癖がついてしまう」という自由記述回答が見られた。この点から、保育現場では抱っこできる時間が限られていることや、「抱っこ」を癖として捉えていることが読み取れる。さらに、「肩こりがひどい」という回答から、保育が肉体的疲労を伴う労働であることや、その疲労の度合いが保育行動を変化させ、保育の質も変化させているという可能性も考えられる。

このように、保育士による「抱きしめ」や「抱っこ」の効果について示唆する研究がなされ、保育現場における「抱っこ」の意義についても考察が行われているが、保育所には業務の多さや保育士不足などの問題がある。帆足(2001)は、「子どもたちの求める「抱っこ」に保育現場や家庭が応えてこなかった可能性は十分にある」と指摘している。保育所保育指針(2018)に、「乳幼児期は生涯にわたる生きる力の基礎が培われる時期」と記されている通り、乳幼児の保育に関わる全ての人々が共通理解をもって一貫した保育を行うことが望まれる。そして、「抱っこ」がどのような保育場面において、どのような根拠に基づいて行われているのか、保育者の自覚的な内的意図による意識の実態を明らかにすることは、「抱っこ」それ自体の保育行動の適切さに関する基準を裏付けるための基礎的資料になる。よって、本研究では、保育士の「抱っこ」に関する意識や「抱っこ」を実施する基準を明らかにし、保育現場での「抱っこ」の現状について検討する。

2. 研究方法

2.1 目的

本研究では、保育士の乳児に対する「抱っこ」の基準に関する意識を明らかに

することを目的とする。

2. 2 仮説

仮説 1. 内的作業モデル「安定」因子得点が高い保育者ほど、情緒的な理由から子どもを抱っこする傾向にある。

仮説 2. 内的作業モデル「アンビバレント」因子得点が高い保育者ほど、子ども間・保育者間で起こりうるトラブルを回避したいという理由で子どもを抱っこする傾向にある。

仮説 3. 内的作業モデル「回避」因子得点が高い保育者ほど、子どもに抱き癖がついてほしくないという理由で子どもを抱っこしないという判断をする傾向にある。

2. 3 方法

調査対象者は、A 県内の保育所に勤務している保育士 40 名、B 県内の認定こども園 3 園に勤務している保育士計 90 名、C 県内の保育所に勤務している保育士 30 名の計 160 名に質問紙を配布した。調査は 2020 年 11 月下旬～12 月に行い、質問紙の配布と回収については、調査者が各施設の園長に調査協力と質問紙の配布を依頼し、各施設に郵送した。回収は郵送によって返送してもらった。調査に用いた質問紙は、研究実施者を中心として、原案の段階で、現役保育士 2 名や大学院を既に修了した専門家 1 名（現在保育者養成校に勤務）に確認し、項目を選定した。なお、調査用紙には、研究の主旨や調査への協力・拒否の自由、匿名性の保証、データの管理と活用方法、回答をもって研究に同意したとする旨を明記した。回収の際は、回答者のプライバシーが守られるように個別の両面テープ付きの封筒に質問紙を入れ、各自で封をして、園長もしくは園内に設置してもらうよう依頼した回収ボックスで回収を行う方法を用いた。提出の際に回答の有無がわからないため、未回答でも不利益が生じることがないように配慮した。

アタッチメントの測定に使われる質問紙法の 1 つである「内的作業モデル尺度（戸田，1988）」は、個人が他者と自分との関係をどのようなものとして捉えているかについてアタッチメント理論の観点から測定する尺度であり、「安定型」、「両価型（アンビバレント型）」、「回避型」の 3 つのパターンを特性として捉え、各特性の個人内での相対比較によって内的作業モデルの個人差を測定するよう構成されている。「安定型」は、他者は応答的で自分は他者に援助される価値のある存在であるという表象を持つことを特徴としている。具体的な質問項目としては、“た

いていの人には私のことを好いていてくれると思う”などである。「両価型（アンビバレント型）」は、他者に対して信頼と不信のアンビバレントな表象を持ち、強い自己不全感が特徴である。具体的な質問項目は、“人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある”などである。「回避型」の特徴は、周囲からは敵意が強く不安も高いと評価されているにもかかわらず、自己評価では苦痛はなく、社会的にコンピテントであると認知していることである。

具体的な質問項目は、“私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやっていけると思う”などの項目から構成される。これらを含む計 18 項目について、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「あてはまる」「非常によくあてはまる」の 6 段階評定で尋ねる。得点が高いほど、これらの特徴が顕著なことを示している（今野・吉川，2016）。

2. 4 倫理的配慮

本研究は聖徳大学倫理委員会に申請を行い、承認を得ている（【R02U012】承認日：2020年11月25日）。

2. 5 調査内容

① フェイスシート

調査対象者の年齢、性別、保育経験年数、現在の担任クラス、現在の勤務役職について尋ねた。年齢に関しては、「20歳未満」「20～24歳」「25～29歳」「30～34歳」「35～39歳」「40～44歳」「45～49歳」「50歳以上」の8件法とした。保育経験年数に関しては、「1年未満」「1～5年未満」「5～10年未満」「10～15年未満」「15～20年未満」「20～25年未満」「25年以上」の7件法とした。現在の担任クラスに関しては、「0歳児」「1歳児」「2歳児」「3歳児」「4歳児」「5歳児」「その他」の7件法とした。担任のクラスを持たず、フリーの保育士として勤務している保育士がいることを想定し、「その他（ ）」というようにカッコ内に記入してもらった。勤務役職に関しては、「主任」「担任」「保育補助」「その他（ ）」の4件法とした。

② 内的作業モデル尺度

保育士自身の愛着スタイルの状態を調べるため、戸田（1988）によって開発された内的作業モデル尺度を用いた。項目数は18項目で、6件法（1「全くあてはまらない」～6「非常によくあてはまる」）で回答を求めた。

③ 抱っこに関する保育事例(自作)

予備調査の結果をもとに作成した質問紙を用いた。保育者が抱っこをする／しないについての選択に迫られるような保育事例4場面に対し、抱っこをするか抱っこをしないかのどちらかを選択し、選択した理由として想定される6項目について、5件法(1「全くそうは思わない」～5「非常にそう思う」)で回答を求めた。

④ 抱っこに関する考え(自由記述)

「抱っこ」という行動に対し保育者が考えていることや、心掛けていること等を自由に記述する欄を作成した。

3. 結果

本調査では、計160部の調査用紙を配布し、その結果137名から回答を得た(回収率85.6%)。回答に不備がある6名を除外し、131名の回答をもとに分析を行った。調査対象者の属性は、以下の通りである(Figure1～4)。

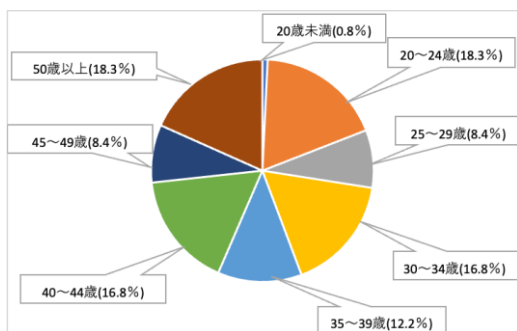


Figure1 保育者の年齢区分

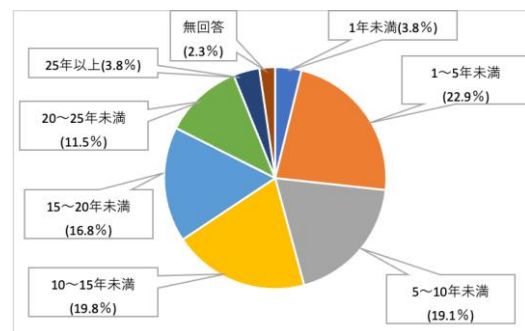


Figure2 保育者としての経験年数

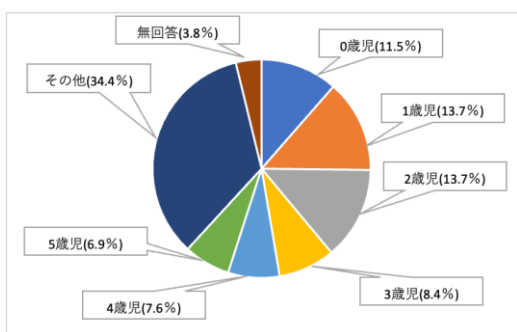


Figure3 保育者の現在の担任クラス

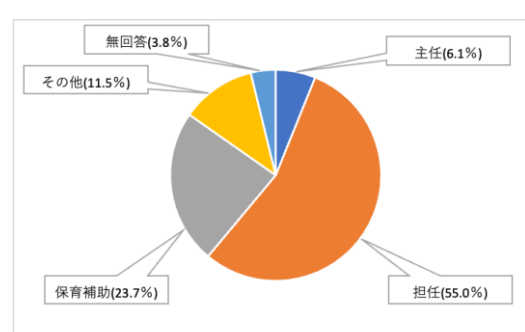


Figure4 保育者の現在の勤務役職

3. 1 内的作業モデル尺度

内的作業モデル尺度 18 項目について最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。内的作業モデル尺度 18 項目の平均値、標準偏差を算出し偏向状況を確認したものを Table1 に示した。

Table1 内的作業モデル 各因子の評定平均値

項目	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。	3.64	0.89
2 自分を信用できないことがよくある。	2.95	1.01
3 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。	2.24	1.14
4 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。	2.38	0.85
5 あまり人と親しくなるのは好きでない。	2.45	1.04
6 私は人に好かれやすい性質だと思う。	3.36	0.91
7 ときどき友だちが、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にい くれないのではと心配になることがある。	3.00	1.16
8 ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。	3.63	1.24
9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりする イライラしてしまう。	2.98	1.15
10 私はすぐに人と親しくなる方だ。	3.46	1.13
11 人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	2.88	0.91
12 人は全面的には信用できないと思う。	2.90	1.07
13 あまり自分に自信がもてない方だ。	3.87	1.18
14 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	3.75	1.02
15 人に頼るのは好きではない。	2.92	1.10
16 初めて会った人とでも上手くやっていける自信がある。	3.21	1.21
17 どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になっ	3.00	1.17
18 私は知り合いが得意な方だ。	3.21	1.11

探索的因子分析の結果、全ての項目が戸田（1988）と同様に 3 因子に分かれ、原尺度と同様の因子構造が確認された。因子を構成する項目の組み合わせも先行研究のものと同様であったため、それぞれの因子名は先行研究に倣い、因子Ⅰを「安定」因子、因子Ⅱを「アンビバレント」因子、因子Ⅲを「回避」因子とし、それぞれの因子を構成する項目得点の合計点を因子得点とした。各下位尺度について信頼性の推定値として α 係数を求めた。「安定」因子は $\alpha = .843$ 、「アンビバレント」因子は $\alpha = .824$ 、「回避」因子は $\alpha = .605$ であり、「安定」因子と「アンビバレント」因子は十分な信頼性が認められ、「回避」因子はある程度の信頼性が認められた。因子間相関において、「安定」因子と「アンビバレント」因子では $r = -.490$ と比較的強い負の相関関係があると認められた。「安定」因子と「回避」因子では $r = .121$ とほとんど相関関係は認められなかった。「アンビバレント」因子と「回避」因子では $r = -.281$ と弱い負の相関関係が認められた（Table2）。

Table2 内的作業モデル 因子分析

項目	因子負荷量			
	I	II	III	
I. 安定 (α=.843)				
10 私はすぐに人と親しくなる方だ。	.879	.170	-.084	
18 私は知り合いが得意な方だ。	.799	.043	-.066	
16 初めて会った人とでも上手くやっていける自信がある。	.767	-.072	-.102	
6 私は人に好かれやすい性質だと思う。	.724	.083	.242	
14 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	.482	-.198	-.193	
1 たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。	.473	-.029	.120	
II. アンビバレント (α=.824)				
7 ときどき友だちが、本当は私を好いてくれているのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。	.090	.823	.263	
11 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	-.034	.738	.160	
8 ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。	-.045	.718	-.218	
4 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。	.146	.619	.152	
13 あまり自分に自信がもてない方だ。	-.180	.556	-.372	
2 自分を信用できないことがよくある。	.011	.505	-.108	
III. 回避 (α=.605)				
9 あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。	-.007	.204	.606	
3 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。	.220	-.125	.498	
15 人に頼るのは好きではない。	-.132	.061	.442	
5 あまり人と親しくなるのは好きでない。	-.496	-.072	.414	
17 どんなに親しい関係であろうと、あまりなれなれない態度をとられると嫌になってしまう。	.010	.001	.393	
12 人は全般的には信用できないと思う。	-.166	.213	.282	
	因子間相関	I	II	III
	I	—	-.490	.121
	II	-.490	—	-.281
	III	.121	-.281	—

3. 2 抱っこする・抱っこしない回答

Table3は、各事例に対し抱っこすると答えた保育者と抱っこしないと答えた保育者の集計表である。各事例に対し、「抱っこする」「抱っこしない」を選択した人数に差があるか否かを検証するため、4事例それぞれに関してカイ二乗検定を実施した。分析の結果、事例1「登園の場面」は $\chi^2(1) = 119.28$ 、 $p < .01$ 、事例2「製作活動の場面」は $\chi^2(1) = 11.61$ 、 $p < .01$ 、事例3「子どもを叱る場面」は $\chi^2(1) = 28.41$ 、 $p < .01$ 、事例4「午睡の場面」は $\chi^2(1) = 131$ 、 $p < .01$ であり、すべての事例で「抱っこする」「抱っこしない」の回答の間には有意な関連がみられた。

Table3 保育者の乳児を抱っこする・抱っこしないに関する意識

	事例1 登園の場面	事例2 製作活動の場面	事例3 子どもを叱る場面	事例4 午睡の場面
抱っこする	128	46	35	131
抱っこしない	3	85	96	0
計	131	131	131	131

3.3 抱っこする理由/抱っこしない理由尺度構成

分析は、統計ソフトウェアである SPSS を用いた。まず、抱っこする理由尺度の 6 項目で固有値を求めると、固有値の減衰状況 (2.61、1.13、0.82、0.53、0.48...) と解釈可能性から 2 因子解が妥当と考えられた。これらの結果をもとに探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った結果、2 つの因子に対して低い負荷量を示した項目が 1 項目みられたため、当該の項目を削除して再度同様の探索的因子分析を行った (Table4)。

なお、回転前の 2 因子での累積寄与率は 60.23% であった。第 1 因子は、「園やクラスの方針に沿いたいから」「トラブルを避けたいから」「子どもがかわいそうで何かしてあげたいから」という 3 項目から構成されている。「トラブル回避」因子と命名した ($\alpha = .654$)。第 2 因子は、「子どもを安心させたいから」「子どもとの信頼関係を築きたいから」という 2 項目から構成されている。保育者が子どもの愛着形成や安心感、保育者と子どもとの信頼関係を重視して抱っこを実践する内容を表す項目に高い負荷を示していたため、「情緒的対応」因子と命名した ($\alpha = .614$)。

Table4 抱っこする理由因子分析

項目	因子		共通性
	I	II	
I. トラブル回避 ($\alpha = .654$)			
3. 園やクラスの方針に沿いたいから	.724	-.017	.524
2. トラブルを避けたいから	.701	-.110	.504
1. 子どもがかわいそうで何かしてあげたいから	.479	.216	.276
II. 情緒的対応 ($\alpha = .614$)			
4. 子どもを安心させたいから	-.172	.773	.627
6. 子どもとの信頼関係を築きたいから	.211	.646	.462
因子間相関	I	—	.109
	II	.109	—

除外された項目は「5. 他の子を落ち着かせたいから」であった。

次に、「抱っこしない理由」の 6 項目で固有値を求めると、固有値の減衰状況 (3.43、0.68、0.59、0.52...) と解釈可能性から 1 因子解が妥当と考えられた。累積寄与率は 57.19% であった (Table 5)。全ての項目が .59~.76 という高い因子負荷量をもって第 1 因子に寄与しており、「子どもに抱き癖がついてほしくな

いから」という項目が.764と最も高い因子負荷量を示したことから「抱き癖考慮」因子と命名した。

Table5 抱っこしない理由 因子分析

項目	因子	
	1	共通性
I. 抱き癖考慮 ($\alpha = .828$)		
4. 子どもに抱き癖がついてほしくないから	.764	.584
2. 一人を抱っこするとキリがなくなるから	.747	.558
1. すべての子どもに平等に接したいから	.715	.511
6. 忍耐力のあるつよい子になってほしいから	.684	.468
3. 園やクラスの方針に沿いたいから	.677	.458
5. 他の子を落ち着かせたいから	.590	.348

3. 4 内的作業モデルと抱っこする理由／抱っこしない理由尺度の関連

内的作業モデルの3パターンと抱っこに関する保育事例への回答との関連について検討するため、まず、「安定因子」「アンビバレント因子」「回避因子」それぞれを高中低の3群に分類した。「安定因子」は高群53名(22~36点)、中群39名(18.1~21.9点)、低群39名(9~18点)であった。「アンビバレント因子」は高群42名(21.1~36点)、中群48名(17~21点)、低群41名(8~16.9点)であった。「回避因子」は高群42名(17.1~36点)、中群38名(15.1~17点)、低群51名(6~15点)であった。それらを独立変数、事例に対し抱っこをする理由の「トラブル回避」「情緒的対応」の2因子、抱っこしない理由の「抱き癖考慮」の1因子を従属変数とする一元配置分散分析を行った。

3. 4. 1 安定因子と抱っこする理由／抱っこしない理由の関連

内的作業モデル「安定因子」を独立変数、4事例それぞれにおける、抱っこをする理由の「トラブル回避」「情緒的対応」の2因子、抱っこしない理由の「抱き癖考慮」の1因子を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、高群・中群・低群に有意な群間差は見られなかった。

3. 4. 2 アンビバレント因子と抱っこする理由／抱っこしない理由の関連

内的作業モデル「アンビバレント因子」を独立変数、4事例それぞれにおける、抱っこをする理由の「トラブル回避」「情緒的対応」の2因子、抱っこしない理由の「抱き癖考慮」の1因子を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、事例1「登園の場面」、抱っこする理由の「トラブル回避」因子において有意な差が得られた($F(2, 128) = 4.83, p < .01$)。Tukey法による多重比較を行ったと

ころ、「アンビバレント」因子低群と「アンビバレント」因子高群において有意な差が認められた (Figure5)。

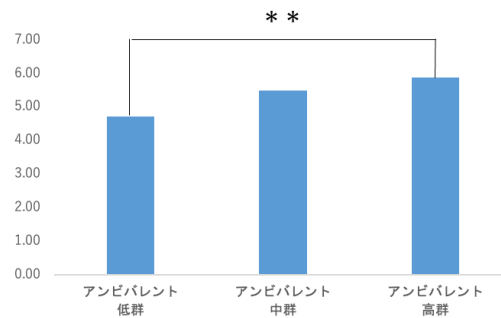


Figure5 アンビバレント因子と事例1・抱っこする・「トラブル回避」因子得点の比較

3. 4. 3 回避因子と抱っこする理由／抱っこしない理由の関連

内的作業モデル「回避因子」を独立変数、4事例それぞれにおける、抱っこをする理由の「トラブル回避」「情緒的対応」の2因子、抱っこしない理由の「抱き癖考慮」の1因子を従属変数とする一元配置分散分析を行ったところ、事例2「製作活動の場面」、抱っこする理由の「情緒的対応」因子において有意な差が得られた ($F(2, 128) = 3.34, p < .05$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、「回避」因子低群と「回避」因子高群において有意な差が認められた (Figure6)。さらに、事例2「製作活動の場面」、抱っこしない理由の「抱き癖考慮」因子において有意な差が得られた ($F(2, 128) = 3.05, p < .10$)。Tukey法による多重比較を行ったところ、「回避」因子低群と「回避」因子高群において有意な差が認められた (Figure7)。

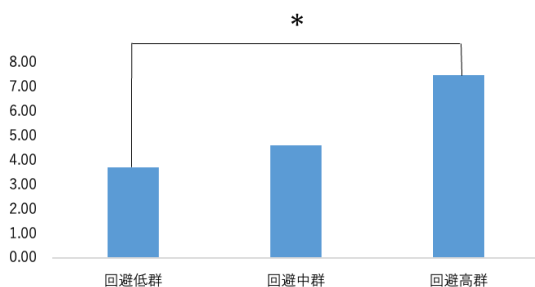


Figure6 回避因子と事例2・抱っこする・「情緒的対応」因子得点の比較

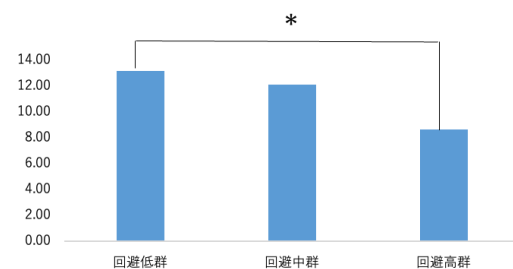


Figure7 回避因子と事例2・抱っこしない・「抱き癖考慮」因子得点の比較

4. 考察

4. 1 抱っこする／抱っこしない回答について

事例1「登園の場面」と事例4「午睡の場面」では、「抱っこしない」と回答した保育者よりも「抱っこする」と回答した保育者の割合が高かった。また、事例2「製作活動の場面」と事例3「子どもを叱る場面」では、「抱っこする」と回答した保育者よりも「抱っこしない」と回答した保育者の割合が高かった。

これらのことから、各保育場面の差異によって、保育者が乳児を「抱っこする」際の基準の意識にも差異が見られることが示唆された。すなわち、乳児を抱っこする「あるいは抱っこしない」という選択の背景には、保育者が捉える独自の「判断基準」が存在していると考えられる。

4. 2 抱っこする理由尺度

抱っこする理由尺度は、探索的因子分析により2因子構造であることが示された。第1因子「トラブル回避」の「子どもがかわいそうで何かしてあげたいから」項目は、因子の中で最も因子負荷量が低かった。ここでの「子どもがかわいそう」という保育者の感情は、一見、抱っこに関する情緒的な安定を促すための理由と捉えることも可能である。しかし、もう一つの視点として、保育者と子どもとの愛着形成や信頼関係の構築といった長期的なねらいを持った理由というよりも、情緒不安定な状態にある子どもや甘えている子どもに、とりあえず今は泣き止んでほしい、落ち着いてほしいという、事態の短期的収束を重視していると捉えることもできる。よって、「子どもがかわいそうで何かしてあげたいから」項目が、「トラブル回避」因子に含まれていることは妥当な結果であるといえよう。

第2因子の「情緒的対応」は「子どもを安心させたいから」「子どもとの信頼関係を築きたいから」という、子どもの情緒の安定と保育者との信頼関係の構築に関する項目により構成され、子どもを心から安心させたい、保育所は安心して楽しく過ごせる場であると感じてもらいたい、さらに保育者を愛着の対象とし、信頼関係を築き、その上で保育を通して成長・発達してほしいという保育者の願いが抱っこをする理由になっていると考えられる。また、「抱っこする」理由項目に「5. 他の子を落ち着かせたいから」という項目があったが、両因子に同程度の低い因子負荷量を示したため、除外することとした。保育者は子どもを「抱っこする」際に、直接対象となる子どもではない他の子どものことを考えながら子ども

を「抱っこする」ことは少なく、抱っこを求めている子どもと自分自身を一对一の関係として捉え、「抱っこする」という判断をしたのであろう。

これらのことから、保育者が子どもを「抱っこする」際の意識には、「トラブル回避」及び「情緒的対応」の基準が関係していると考えられる。すなわち、保育者は子どもを単に抱っこしているだけではなく、教育的意図に準じて「抱っこする」という身体接触を通じた援助を試みているのであろう。

4. 3 抱っこしない理由尺度

抱っこしない理由尺度は、探索的因子分析により1因子構造であることが示された。「子どもに抱き癖がついてほしくないから」項目は最も因子負荷量が高かったため「抱き癖考慮」因子と命名した。「抱き癖考慮」因子に含まれる項目は全て.590～.764という高い因子負荷量を示していた。この結果から、子どもが抱っこを求めているでも保育者が抱っこをしない場合の理由が次のように想定される。具体的には、保育者は子どもに抱き癖がついてほしくないという気持ちや、すべての子どもと平等に関わりたいと考えていたとしても、その一人のみを「抱っこする」ことになった場合、他の子どもからも抱っこを求められる可能性がある。その結果、子どもの欲求に応じて次々に抱っこをしていると多大な時間や労力を費やしてしまい、保育そのものにも悪影響が出てしまうことにつながりかねない。他方、子どもに対して活動のメリハリや多少の忍耐力も身につけてほしい、という保育者による子どもの成長への期待や教育的なねらいも含まれていることが予想される。

これらのことから、保育者が子どもを「抱っこしない」際の意識には、「抱き癖考慮」の基準が関係していると考えられる。すなわち、保育者は子どもを単に抱っこしていないのではなく、物理的な時間や身体的負担を考慮しているのである。それと同時に、保育者は目の前の子どもに育ててほしい資質・能力を願いつつ、抱っこに代わる代替援助を試みているのであろう。

4. 4 内的作業モデルと抱っこする理由／抱っこしない理由尺度の関連

4. 4. 1 安定因子と抱っこする理由／抱っこしない理由尺度の関連

調査の結果、「仮説1.内的作業モデルの「安定」因子得点が高い保育者ほど、情緒的な理由から子どもを抱っこする傾向にある」は支持されなかった。このことから、本研究で用いた抱っこに関する事例では、内的作業モデル「安定」因子

は、保育者が子どもを抱っこする理由・抱っこしない理由に関連していないということが考えられる。

4. 4. 2 アンビバレント因子と抱っこする理由／抱っこしない理由の関連

調査の結果、事例1「登園の場面」において、保育者は「トラブル回避」因子を理由に抱っこをする傾向が高いということが明らかになった。「アンビバレント」因子高群は、事例1「登園の場面」のように子どもの情緒が不安定な状態にあり、子どもが抱っこを求めている様子を見せた際、保育者は「園やクラスの方針に沿いたい」等の「トラブル回避」の理由から抱っこをしていると考えられる。なぜなら、園やクラスの方針に沿わなかった場合、他の保育者との良好な人間関係が維持できないという不安を感じているからであろう。この場合、自身の保育に関する援助にいつまでも自信を持つことができなかつたり、他の保育者からの視線を恐れながら指摘されたりすることを気にしながら保育を行っている可能性があるとも考えられる。

このように、保育者の個人的な考え方が「抱っこする」という保育行動における判断基準の意識に影響を与えているということが示唆された。よって、「仮説2. 内的作業モデルの「アンビバレント」因子得点が高い保育者ほど、子ども間・保育者間で起こりうるトラブルを回避したいという理由で子どもを抱っこする傾向にある」は支持された。

4. 4. 3 回避因子と抱っこする理由／抱っこしない理由の関連

調査の結果、事例2「製作活動の場面」において、内的作業モデルの「回避」因子得点の高い保育者は「回避」因子得点の低い保育者よりも、製作活動の場面において、「情緒的対応」因子を理由に抱っこをする傾向が有意に高いということが明らかになった。「回避」因子高群は、事例2「製作活動の時間」のように、事前に計画された活動の時間に普段から保育士に甘えて抱っこを求めている様子を見せた際、子どもを安心させたい等の情緒的対応の理由から抱っこをしていると考えられる。また、事例2「製作活動の場面」において、内的作業モデルの「回避」因子得点の低い保育者は「回避」因子得点の高い保育者よりも、「抱き癖考慮」因子を理由に子どもを抱っこしないという判断を行っている傾向が高いということが明らかになった。つまり、保育者は、子どもが抱っこを通して保育者に甘えたり、頼ったりすることを悪いことだとは考えていないと言える。しかし、製作活

動の時間など、今は子ども自身の力でがんばってほしいというねらいを持った活動の際は、子どもに抱き癖がつくことを考慮し、抱っこしないという教育的意図を持った判断を行っていると考えられる。

これらのことから、「仮説 3. 内的作業モデルの「回避」因子得点が高い保育者ほど、子どもに抱き癖がついてほしくないという理由で子どもを抱っこしないという判断をする傾向にある」は支持されなかった。一方で、「回避」因子得点が高い保育者ほど、子どもに抱き癖がついてほしくないという理由で子どもを抱っこしないという判断をする傾向にあることが示唆された。

5. おわりに

本研究では、保育者個人の持つ内的作業モデルのパターンが抱っこやその理由に影響を与えているということや、保育者は保育場面で見られる子どもの姿に応じて臨機応変な対応をとる、という判断基準に応じて保育実践を試みている傾向があるということが明らかになった。複数の保育者が共同で保育を行えば、抱っこに関する認識が多少異なるのは自然なことである。しかし、保育者は、自身の持つ「抱っこする」際の判断基準を客観的に意識し、それ自体が目の中の子どもの豊かな育ちやその先の将来に影響を与えている可能性があるということに自覚して保育を行う必要がある。村井（2019）は保育者の意識を理解する上で、「抱っこ」という行動について単に習慣として捉えているのか、関係づくりや関わりとして捉え子どもと接しているのかを確かめていくことが重要であると述べている。これまでの先行研究では、抱っこの定義や保育の中での抱っこの位置づけは明確でなく、保育者の資質や保育所のその日の状況によって変化する場合が多い。そのため、保育者は自身の援助を、園やクラスの方針、子ども・他の保育者の状況などに合わせて即興で臨機応変に対応しているのが現状である。

本研究では、保育者の子どもに対する「抱っこする」際の基準に関する意識を明らかにしたが、「抱っこ」の援助そのものが子どもの発達に与える影響を明らかにしていない。したがって、今後は保育者へのインタビュー調査を通して、その点を明示的に証明していくことが課題である。

【引用文献】

- Ainsworth, M.D.S, 1963, The development of infant-mother interaction among the Ganda, In B.M.Foss(Ed.)、Determinants of infant behavior II、67-112、London: Methuen.
- 秋田喜代美、2016、あらゆる学問は保育につながる—発達保育実践政策学の挑戦、東京大学出版
- Cunha, F., J.Heckman, L.Lochner and D.V.Masterov、2005、“Interpreing the Evidence of Life-Cycle Skill Formation”、IZA Discussion Paper Series、No.1575、Institute for the Study of Labour、Bonn、Germany、July
- 遠藤利彦、2005、アタッチメント理論の基本的枠組み、In 数井みゆき・遠藤利彦編 アタッチメント—生涯にわたる絆、ミネルヴァ書房
- 帆足暁子・吉田弘道・帆足英一、2001、乳幼児における「抱っこ」の意義について、第54回日本保育学会大会論文集、360-361頁。
- 飯塚有紀、2009、乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望と今後の課題、人間文化創成科学論叢、第12号、183-190頁。
- 池田佐輪子・楠凡之、2019、保育所における子どもの愛着形成への理解と支援、北九州市立大学文学部紀要、第26巻、1-22頁。
- 粕谷貴志・菅原正和、2001、中学生の内的作業モデルと学校適応との関連、岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要、第11号、137-145頁。
- 川喜田二郎、1967、発想法—創造性開発のために、中央公論社
- 数井みゆき、2001、乳幼児期の保育と愛着理論:子どものより良い発達を求めて、母子研究、第21号、62-79頁。
- 小島千恵子・市野繁子、2019、乳児保育の充実—保育所保育の現状からの一考察—、名古屋短期大学研究紀要、第57号、37-49頁。
- 近藤清美・尾崎康子編、2017、講座・臨床発達心理学④社会・情動発達とその支援、ミネルヴァ書房
- 今野義孝・吉川延代、2016、愛着スタイルと自尊感情との関連性—身体感覚への態度、マインドフルネス、反すう、レジリエンスの媒介効果—、『人間科学研究』文教大学人間学部第、第38号、137~148頁。
- 厚生労働省、2022、「保育所等関連状況取りまとめ（令和4年4月1日）」、

<https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000979606.pdf>、(2023-9-30 アクセス)

- 村井昌子、2019、乳児の生活活動における保育者の意識—抱っこの視点より—、大阪総合保育大学紀要、第14号、29-41頁。
- 西條剛央、2002、母子間の「横抱き」から「縦抱き」への移行に関する縦断的研究：ダイナミックシステムアプローチの適用、発達心理学研究、第13巻、第2号、97-108頁。
- 西條剛央、2004、母子間の“離抱”に関する横断的研究：母子関係を捉える新概念の提唱とその探索的検討、発達心理学研究第、第15巻、第3号、281-291頁。
- 作田勉、1981、ボウルビィ母子関係入門、星和書店
- 社会福祉法人保育協会（2012）、「保育所における低年齢児の保育に関する調査研究」、
<https://www.nippo.or.jp/Portals/0/images/research/kenkyu/h24baby5.pdf>
(2020-4-16 アクセス)
- 庄司順一・奥山真紀子・久保田まり、2008、アタッチメント 子ども虐待・トラウマ・対象喪失・社会的養護をめぐって、明石書店
- 竹澤博美・相守節子・牧野雅美・堀親秀、2007、「抱きしめる」という効果、新田塚医療福祉センター雑誌、第4巻、第1号、17-18頁。
- 戸田弘二、1988、青年後期における基本的対人態度と愛着スタイル：作業仮説からの検討、日本心理学会第52回大会発表論文集、27頁。

(受付日：2023年10月13日、

受理日：2024年3月11日)

中日教育研究学会『アジア教育文化ジャーナル』

発行日：2024年3月16日

発行者：中日教育研究学会

編集：中日教育研究学会電子ジャーナル委員会

Journal of Asian Education and Culture

No. 6 March 2024

ARTICLE

YOSHIE SAKUMA

Awareness of Childcare Workers Regarding the Criteria for Holding Infants 1

RESEARCH NOTE

TAKAMI NAGANUMA, KEIKO HOUTA, FUMIKO NIMURA, YUKA KATAOKA,

KEIKO HAMAGUCHI, ASAKO NAKAMITSU, MIKA SATOU

Changes in Junior High School Students' Feelings toward Children and Their Consciousness
toward Future Careers through Participating in a Hands-on Bathing Experience Classes · 21